
無口な姫と顔色の悪い王子

茶壺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無口な姫と顔色の悪い王子

【Nコード】

N2318Y

【作者名】

茶壺

【あらすじ】

「お見合いなんかするかーっ！」と叫んだエルクだが、父親である王と親友であるキースに半ば無理矢理お見合いをさせられることになってしまう。しかも相手国とは微妙な関係で、自分の対応次第で不仲にもなりかねない状況に、エルクの血の気は引いていく。はたして若干へたれな王子は「つつがなくお断り」し、無事に帰ることが出来るのか。

きっかけ（前書き）

どうも、茶壺と申します。

拙作ではございますが、誤字脱字のご指摘や感想批評などはんばん受け付けておりますので、よろしくお願いいたします。テンションで執筆スピードが上がったり下がったりする駄目な奴なので……。

とりあえず書き終わるまでの目標は、

『文章が上手くなる！』
です。

きっかけ

「さて、今日は逃がさないぞ、エルク」

国王は目の前の青年に厳かに言い渡した。

その横では、警護の親衛隊員が大笑いしている。どうやら、精一杯この出来事を楽しんでいるらしい。

「……俺、決めたよ。いつかお前クビにする」
眉間に皺を寄せ、不機嫌全開に青年が言った。

なぜかその体は縄でがんじがらめに縛られており、手も足も動かない。糞虫という生き物をまさに体現している情けないことこの上ない姿だ。

いつもより九十度傾いた視界の先で、自分の父親が立ち上がった。
顎髭が妙にダンディな国王は、スツと目を細める。

「……逃がさんぞ」
「……だからって息子を縛るな」

言い返した自称国王の息子、いや、実際に国王の息子。名前をエルク・フローラル・カイリという。

国王の息子　つまり王子であるエルクは、その身分にふさわしくない格好をしていた。

いわゆる町の商人の格好で、頬にも若干煤がつき、髪は乱雑にぼさぼさ。そう、このまま町へ出て行けば、下流階級の人間として見てもらえるような。

「逃げる気だっただろうが」

父親に真っ正面から真実を言い渡され、サツとエルクは目をそらした。ちっ、勘の良い親父だ、内心口汚く吐き捨て、エルクは恨みがましく己を縛った親衛隊長を睨み付ける。

その鋭い視線を堂々と受け止め、幼馴染みは髪をかき上げた。

「ふっ。エルク、お前は単純なんだよ。毎回毎回同じ隠し通路使ってたら、そりゃばれる」

「やかましい！ キース、俺はおまえ以外にあの路を教えた覚えはねえぞ！」

「だから俺が捕まえたんじゃないか」
「ぐっ」

きらびやかな金髪が空を舞い、目に眩しい。というか鬱陶しい。あの不自然なまでに整った顔を殴りたい。王子らしからぬ願望を握り締めた拳で発散するエルク。

はつきり言つて、容姿から見れば確実にキースの方が皇子らしいだろう、とエルクは思っている。長いまつげも、高い鼻も 整いすぎて、文句の付けようがない。己の鳶色の髪と見比べても、その金髪の見事なこと。

……だからこそムカツクのだが。

あの野郎は知っているだろうか その昔、と言つても二年ほど前、城の中でキースを取り合つて、女中達が暗い争いを繰り広げていたことを。そして何故か最終的にキースはエルクと付き合つてからそれを応援しようという訳の分からない結論に至ったことに。

ぞわわっ、思い出したエルクの背中に、寒い物が走った。

そうやってエルクが苦くあまり思い出したくない思い出を噛み締めていると、国王が再び椅子に座った。その前には一枚の紙が。ペンを取り上げ、何かを書き込もうとする。

エルクは必死に芋虫状態から起き上がった。間違いなくアレは、招待状。恐らく、OKのサインをして返送されるのだろう。

「本人の意思もなしに返事をするのは、いかかがなものでしょうか
父上！」

「……その都合の悪いときだけ父上呼ばわりするのをやめんか」
見破つてやがる、この親父。

その昔、まだエルクが幼い頃。よくちちうえーと国王に様々な物をねだっていたのだが、今でも父上と呼ぶと反射的にエルクの願いを叶えてしまう、という困った条件反射が身についてしまったのだ。使用例・「犬買って父上」。

しかしどうやら今回は不発。間の悪い。

ぎりぎりと体を締め付ける縄。きっちり縛ってあり、どうにも抜け出せそうにない。

「こんのっ……！」

額に血管が浮くほど力を込め、エルクは少しでも縄をゆるめようと藻掻くが、

「ふははははっ。この俺が結んだんだぞ。簡単にほどけるわけがないだろ」

高笑うキース。せめてこいつをぶん殴らせてくれ、エルクはいるかどうか分からない神様に懇願した。いや、実際は自分の力で抜け出してやらないと気が済まないわけだが。

「こうなったら魔法をつか」

「われると困るからちゃんと魔法封じの縄だ、感謝しろよ」

「ふんぎぎぎっ！ コノヤロウツ！」

「……呆れた奴だ。そうまでして見合いをしたくないのか、お前は父親の呆れた声に、

「当然だ！ なんでわざわざ見合いなんかせならんのっちゅーわけだ！ 相手は姫様だぞ！ 高飛車で偉そうなんじゃねえかって言ったら母上がそんなことないわよとか言ったから出向いてやったのに、終始馬鹿にされ続けたよ！ 第一後継者じゃない奴には興味ないんだとっ！ 俺だって好きで弟やってんじゃねーってんだちくしよーっ！」

「む……」

「そもそもだ！ 別に見合いなんかいらんだろーよ！ 兄さん達は完璧だ！ あの人たちがいりゃあ他に何もいらん！」

「そももいかなのだ」

「政略結婚なんかお断りじゃーっ！ 俺はまだ十七だぞっ？ 兄さん達でさえまだ結婚してないのに、なんで俺だけ？ 納得がいかなわーっ！ つーかあいつらしい年だろ？ さっさと結婚しろーっ？」

「……相手はクローベル王国の姫なんだ」

「……………む」

横からの声に、あれだけ大声で捲し立てていたエルクが押し黙った。キースに目だけで訊ねると、黙って首を振る。探るような目つきで、父親を見上げる。

「あのクローベルが？ ……どういうことだ？ 何があつたんだよ父上」

クローベル王国とは、大陸の中でこの国とは相反する位置にある大国で、東西で対をなす国同士、あまり仲がよろしくない。……険悪、と言つほどではないが。

そんな国が、どうして？

「うむ。どうやら……………」

「向こうの姫様が、お前に一目惚れしたらしい」

「……………つちくしよー……………、今回だけだかな、ぜつてーだぞ。もう行かねー、行きたくねー……………」

キリキリ痛む胃を抱え、ごとごと馬車に揺られながら、必死に精神統一をし続けるエルクに対し、キースはけらけら笑いながら、

「まあまあ、体面上今回だけでも行かなきゃならんだろ。むげに断つて開戦の口実にされたらたまらんしな」

「分かつてるつっの。だからこうして……………あー、降りてー」

キースの言葉はもちろん冗談だが、時たま冗談で済まない時だつてあるのだ。災いの種があるのなら芽を出す前に種を落とした根源から焼き払え、それがエルクの父親の信念である。そこまで徹底した性格は政治にも反映され、それが堅王と呼ばれる所以でもある。「……………でもさー、礼儀とかー、お作法とかー、行儀とかー、うあー

……」

一応曲がりなりにとも一国の代表として見合いに行くのである。ここで恥をかこうものなら、それはもう国の恥に直結。だから気を引き締める、とメイド長に言われたのが三日前。

今日はとうとう、着いてしまつのである。

そう、着くのだ。

「帰りたい……！」

じたばた藻掻いても無駄なことは知っているが、それでも藻掻かずにはいられない。当然今は礼服なので、乱れない程度にもがいていると、

「ついたぞ」

「……！」

城門の前に、着いてしまったらしかつた。

「ほら、上半身屋根から出せ。そしてとびきりの笑顔で手を振れ」
すぱんっ、と勢いよく開かれる天板に、エルクはびくりと身体を跳ね上げる。顔は緊張の色に染まり、冷や汗が滝のように流れ落ちていた。

だがそこは腐っても王子。高級服の袖で汗を乱暴に拭い、エルクは片手で自分の顔面をなで上げる。するとそこには、

「どうよ」

爽やかスマイルを振りまく王子の姿が。

「……三日間、ボロが出ないようにな」

「……そこまで俺は保つか？」

「……分かん」

親友とこそ話し合うと、意を決してエルクは屋根から上半身を乗り出した。

莊厳。

たかだか人間一人を出迎えるのに、この人数。城門から城の正面玄関まで剣を突き上げた兵士達が居並び、その後ろでは聖歌隊が神を称える歌を見事な声で紡いでいる。楽器の音も聞こえてくるし、

きつと一番後ろの高い場所に立っているのはこの国の貴族たちだろ
う。

「……嗚呼。胃が痛い」

「……気が弱いな」

「……じゃあお前がここから手を振れよ。絶対その方があそこにい
る女中さんとかは喜ぶぞ」

「……その場合、俺が王位継承者になるけど良いのか？」

「……ついでに見合いもやってくれると助かる」

「……結婚したら王様か。なかなかいいな」

「……いいか？ 結構大変だぞ」

「……親衛隊長をこの年で務める方が大変だよ」

「……ああ。お前、半分コネだもんな」

「……まあな」

「……威張るな」

そんな軽口をぼそぼそ言いながらも、外に向かって手を振るエル
クの顔は完璧な笑顔だ。その様子を下から眺めながら、

「………なんだかんだ言っても、やるときゃやるよな」

とキースは聞こえないように呟いていた。

1 1 沈黙のお見合い

見合い相手と二人きりになってから、既に二時間が経過しようとしていた。

最初の挨拶以降、未だ両者とも一言も発していない。

ど、どどどうすればいいんだ。

こういう場合はやはり男から口を開くべきだろうか。エルクは手の平にじつとりと嫌な汗をかきながら、それでも王子様スマイルだけは崩さずに豪華な椅子に座りながら考える。

一日目は、この国の国王と対面し、社交辞令のようなものを述べあげるだけで終わった。それからは疲れているだろうということので、客室に一晩泊めて貰い今朝を迎えたのだ。

しかし緊張で朝早くに目が覚めてしまい、メイド長から言われたクルーベル王国での行儀礼儀作法慣習を繰り返し暗唱し、相手に失礼、または恥にならないような行動をイメージ。それでいてちゃんと自国のマナーで接しなければならぬ、と部屋の中をうろろ歩き回って時間を潰した。

たかだが十七歳と言えども、国の看板を背負っているようなモノなのだ。万が一があつてはならない。そういつた重圧に耐えきれぬのが、王位継承者の器。

で、そんな重圧に押し潰された結果、エルクは何も言えずにいるのだ。

だいたい、見合い自体に慣れていないというのに、何故相手が少し仲が悪いくらいと険悪と言うほどではない、みたいな微妙な立ち位置の国の姫なんだ。己の行動次第で仲が良くも悪くもなりそうな、そんな関係の国なのだ。

責任重大じゃないか。

内心悲鳴を上げながら、きらめく笑顔のエルクは目の前の姫様を見る。

……………無表情。

見合い開始から、筋が一筋たりとも動いていない、そう思える。いや、実際は瞬きしたり、お茶を飲んだりしているけれど、それを感じさせない能面のような表情。

気に障るようなことをしたのだろうか。俺は何かやらかしたのだろうか。怒っておられるのだろうか。どう宥めればいいのか。よしんば怒っていなかったとして、これからどう事態を切り抜けられるのだろうか。というか自分から僅かばかりも視線を動かさず、まるで穴でも開けてそこに針を通してやろうかとも思っているかのような彼女の目が怖い。

少し灰色がかった黒の瞳。

流れるような長い髪。

艶やかな薄桃色の唇。

どれをとつても悪くない。むしろ良い。可憐といつても差し支えない。なのに、なんで無表情なのだ。なんで俺を凝視しているんだ。震える指をテーブルの下に隠しながら、エルクはよつこの思いで口を開き、

「シエルさんは、このお茶が好きなんですか？」

「……………割と」

その割とは十割か二割かはたまた五割か、どれだ。

意を決して話しかけたはいいものの、やはり会話は埋没。

もはや泣きそうになりながら、煌びやかな笑顔でエルクは自分のカップに指を伸ばした。少し温度の冷めたそれを、唇をぬらす程度に飲み、

「……………あ、おいしい」

っは！

極度の緊張状態のせいもあつたのだろう。香り、舌触り、のどごし、とにかくお茶の予想外のおいしさに、エルクは思わず素で声を発してしまった。

すぐさま表情を作り直したが、この距離だ。絶対に見られた、聞

かれた。どう思われたらろうか。

「……………」

分からない。相手の感情が読めない。この能面姫はどうやってたら表情を動かしてくれるのだ。

両者沈黙。喋れない。何か言わなければ。

そのまま一時間が経った。

俺は本当に駄目な奴だな！

既に自己嫌悪の領域だ。ここまで自分は喋れない奴だっただろうか。もつと気の利いたことを……こう、こう……あーもう！

エルクの背中が煤けてきたところで、部屋の扉が開かれた。

「エルク様、国王様がお呼びになっておられます」

実質の、見合い終了命令。

使いと共に入ってきたキースの背後に、エルクは後光のようなものを見た。

「招いて頂き、国の代表として、感謝を述べさせて頂きます。またいつか機会があれば、今度は私からご招待させて頂きますね」

につこり、とさらに二十パーセントほど笑顔成分を増量。それから失礼にならない程度に、それでも最大限の速さでエルクは椅子から立ち上がり、そそくさとキールを引き連れて部屋を出て行った。

後に残ったのは、メイドと姫の二人組。

「いかがでしたか？」

エルクの使っていた食器を下げながら、メイドは姫　サキ・クルーセル・シオンに訊ねた。

声を掛けられたサキは機械のような堅い動きでメイドに顔を向けると、それから本当に、本当に少しだけ、微笑んだ。

「やっぱり、いい人」

「それはようございました」

その答えを聞くと、目に見えて嬉しそうにウキウキと後片付け始めたメイドは、鼻歌を歌いながら口を開く。

「姫様が舞い上がっておられるのを見るのは何年ぶりでしょうか。侍女としても大変嬉しく思いますわ。この縁談がうまくいくとよろしいのに。……ああつ？ でももし殿方とあまり会っておられない姫様がたぶらかされているとしたらどうしましょう？ やはりここは私が直々にあの方の背中を刺すべきなのかしら？ きつとそれがいいわね。刃物は台所から拝借するとして、やっぱり狙うべきはこの王国を出てからかしら。あ、姫様安心してくださいね？ ちゃんと私、証拠は微塵も残しませんから」

「たぶらかされてはいないから安心して。向こうは私を覚えていないみたいだったら。きつとそんなこと考えてない」

無感動で平淡だが、確かに耳に残る涼やかな姫の声に、

「それはそれで許せませんわ！ こんなに可愛いのに！ ああもう、ホント可愛いです姫様。私が殿方だったら絶対に放っておきませんのに！ やはりあの方は刺すしかありません。あまりにも礼儀を欠いてます。こんなに可憐な姫様のことを忘れるなんて！ 本当に可愛い！ 食べちゃいたいくらいっ！」

「そんなに褒められると照れるけど、食べないで。おいしくない」

「ああつ、照れる姫様も可愛い！ 勘違いしておられる様子も！ ……ええ、やっぱり刺しましょう。姫様は誰にも渡せませんわ！

ああもう、どうすればいいのかしらこの感情！ 昂ぶりすぎて止められません！ やっぱり刺すわ、刺してこの感情を消化することにしましょう、いえむしろ昇華しましょう！ そうよそれがいいわ！」

「刺しちや駄目」

「分かりました姫様！ 貫きます！」

「やめて」

なんて、どう足掻いても墓の下で死神とご対面しそうな状況に陥っているとはつゆ知らず、キースを隣に連れたエルクは、まわりを他国の侍女達に囲まれながら玉座の間に向かって歩いていった。

憔悴しきりながらも、それでも毅然と胸を張っている。しかし、もはや笑顔を振りまく余力は残されておらず、半ば疲れを漂わせて

いた。

「……寒気がする」

「……どうしたエルク。落ち込んだり寒気がしたり、大変だな。風邪でも引いたんじゃないか？」

「……それは違うけど、背中を何かが駆け上がったいった……」

青い顔のエルクに、ふーんと興味なさげに首を傾げたキールは、

「……ま、あと二十歩ほどで王様とご対面だ。気を引き締めてかれ」

「……分かってる」

「……ほれ、笑え。あの青春を思い出せ、笑えるはずだ。もしくは前回のお見合いの開始数秒でお断りされたことを思い出せ」

「……うるさい、黙れ」

思わず普段通りに牙を剥きそうになったが、人目があると危ういところで気付く。一度深く深呼吸したエルクは、

「あはは。本当にキールは冗談が好きだなあ」

「そんな、勿体ないお言葉です王子」

「あんまり冗談を言いすぎると、あの世で神様が舌を抜くらしいぞ？」

「大丈夫です王子。もし舌を抜かれたとしても、私があなた様への態度を変えるつもりは一切さらさらこれっぽちもございませんのでどうぞご安心を」

「そうか。それは残念だなあ」

「ええ。本当に」

「お前みたいな家臣をもてて俺は本当に（ふ）幸せだよ。帰ったら褒美をやるからな」

「心から辞退させていただきます。なにを頂けるものか分かったものではありませんからね」

「……受け取れよ」

「……いらん」

両者笑顔だが、目が笑っていないかった。

1 1 沈黙のお見合い（後書き）

誤字脱字のご指摘は随時受け付けております。アドバイスも頂ければ今後の参考に致します。

1 2 二人きりなら

しばらくお待ちください。

そんなことを侍女の一人に言われて、二人は扉の前で立っていた。

「……長い」

「……ああ。長いな」

呟きに返したキースに、エルクは続けて、

「……俺、疲れてるんだけど」

「……奇遇だな、俺もだ。管轄外での警護は楽じゃないな」

「……管轄内なら楽だって言いたそうだな」

「……楽だ」

言いやがった、呆れた目をしてでもエルクはキースにそれ以上何も言わない。残念ながら、この親衛隊長は優秀なのだ。まだ荒さは残る、と言われつつも、今は北の方にいる『英雄』の名を持つ将軍に、将来が見込める大器だと太鼓判を貰っていた。

だからこそ、隊長なんて務まっているのだろう。

「お待たせして申し訳ありません。どうぞお入りください」

ようやく扉が開いた。しかし開いたは良いが、侍女たちはそそくさと物陰に引っ込んでしまい、エルクは正面からクローベル国王の視線を受けることになった。

「……ん？」

歩き出そうとしたエルクの足が止まる。キースが不審に思っ
てエルクの視線を追うと、

ほう。

国王の隣で、件の見合い相手が待っている。絢爛豪華さはないが、上品で上質なドレスを身に纏って立っている姿は、それだけで目を惹き付ける。

「……な、ななななな……っ？」

だというのに、エルクの反応はまるでうっかり彼の姉と出会って

しまったときのそれ。挙動不審も良い所で、キースは思わず後ろから指で突く。

「……しっかりしろ」

「……っ。……ああ」

一步、歩き出したは良いモノの、エルクの目は彼女から離せない。自身のことを「シエルと呼んで」と言った姫様が、何故あそこに立っているのだ。

怒られるとかですむのか？

どう考えても相手の機嫌を損ねた、と後悔していたのに、どうしてあそこにいるのか。自ら出向くほど歓迎してくれているとは考えにくい、逆に自ら出向くほど不愉快だったと考える方が自然だ。

つまり、お見合いは失敗した。

当然と言えば当然だ。だって三時間でお茶の好みしか訊いてない。今はあの無表情さえ無言の非難に思え、エルクの足取りは重くなる。だが時とはいつでも無情なモノで、すぐに指定の位置に着いてしまった。

とりあえず、と小さく深く深呼吸。よし、忘れよう。あの姫様は見なかったことにしよう。

深々とお辞儀をしたエルクは、

「今回はご招待にお預かり、心から御礼申し上げます。私たちの国、無論私ですが、貴国からお誘いがあったという話は、将来誇りとして胸に残ることでしよう」

「……うむ」

頷いた国王の右目には、大きな傷跡が残っていた。若い頃戦場でつけた傷らしいが、元々かなり厳つい顔をしているのでいやがおうにも威圧感が増す。

「この度は遠路はるばる、我が娘のワガママのためにすまんかったな。だが、ワシも子供は大事でなあ。おぬしの国の王とは違い、数が少ない故に余計に願いを叶えてやりたいと思ってしまう。本当に、来てくれて嬉しく思うぞ」

それのだが、と一つ呼吸を入れた国王は、隣にいる姫を手招きで呼び寄せた。

「……………」

「……………」

目と目が合う。

わら……………た……………？

僅かに口端が持ち上がったと思ったのだが、目の錯覚かも知れない。あまりに瞬間的な変化に、今見た光景が信じられなかった。

すすす、と滑るように移動し目の前に立った姫様は、エルクの手を取った。

「……………？」

内心驚天動地の心境に辿り着いているエルクに対し、姫様はその右手をやさしく両手で包み込みながら、

「私を、覚えてる？」

と無表情のまま首を傾げた。

「え？」

意表を突かれる。

耳元で、何かが割れる音がした。

気が付くと、周りに誰もいなかった。

これは……………結界？

自分と姫を包み込んでいるモノをとっさに判断しながら、エルクは姫の手を見る。

この人が？

辺りに誰もいなくなったのではない、自分たちが消えたのだ。これはその空間だけ切り取り、異空間にしてしまう上位魔術。

異国の人間を、しかも嘘でも王家の血を引く人間を突然こんな所に放り込むとは、一体どういっつもりなのだろうか。疑問に思いながらも、エルクは自分の中の記憶を探っていく。クルーベル国の姫と対面するようなイベントには遭遇したことはない。

素直に口を開き、

「すみません。覚えてません」

「……そう」

俯いた姫に、エルクは声をかけようとし、

「サキ様」

「シエルって呼んで。あと、敬語もやめて」

どうにも、この条件を呑まないと手を離してもらえそうにない。

「……では、シエル様。申し訳ありませんが、素で喋るとのちのち叱られるので、少しだけ砕けた口調でなら構いませんか？ それと二人きりの時だけ限定でなら」

こくり。

エルクはその頷きを確認し、

「じゃあ、俺から訊いてもいいかな？ なんでこんなことしたの？」

「二人きりで話がしたかったから」

「さつきも二人きりだったんだけど」

「違う。私の護衛が二人天井に。あなたの護衛が三人ベランダにいた」

気付いていたのか。

エルクは軽く驚いた。まさかこの人がそれを知っているとは思わなかった。

「……すごいね。普通、誰もそんなこと分らないんだけど」

「あなたも知っていたでしょう。凄く気にしてたばれていた」

「いや、俺の場合は窓からあいつらの顔が見えて……」

顔を出した三人は明確に「面白そうだからここにいるのである」という目をしていた。睨むとすぐに引つ込んだが。

「ところでシエルさん。いつまでこのままなの？」

「もうそろそろ。私の魔力が切れる」

異空間の維持は相当魔力を食う。この広さの空間を、たった一人でこの時間維持し続けているだけでもかなりすごい。だがそれよりもエルクが驚いているのは、

「……思ったよりも、おしゃべりなんだ」

「？ 私はもともとおしゃべり」

それは嘘だ。

と思っただが言わなかった。

「私はあなたをエルク君って呼ぶ」

「別に呼び捨てでもいいけど」

「シエルさんって呼ばれている内は、君」

そこに変なこだわりがあるらしい。

「やっぱり、周りに人がいないと、喋ってくれる」

ビキリ、と身体が固まった。無表情でよく分からないが、恐らくばれている。己の失礼な考えを、彼女は見抜いている！

「二人きりだと、体裁とか気にしなくていいって、気を抜いてる。何を話してもばれないって思ってる」

「す、すいませ……っ！」

「別に良いけど。でもこれからは」

エルクの喉元に、白魚のような指が当てられた。

「………ね？」

なんでだろう。言いたいことがすごくよく分かる。

冷や汗を流しながら、あはははと青ざめた顔でエルクは笑った。

「が、頑張ります……」

「………」

満足そうに頷いた姫様は、またもや滑るように移動して、元のエルクから離れた場所へ帰っていった。

そして、見慣れた景色が戻ってくる。

1 3 従者として

「……で、なんでそんなやつれてるんだお前は」

客室の中に戻ってくると、真っ先にベランダに備え付けてあった椅子に座り込み真っ白に燃え尽きたまま動かないエルクに、腰に手を当てたキースは呆れて言った。

「警護もまともに来ないような人間に言われたくねえ……」

「……一応、反省しているんだぞこれでも」

「まさか目の前で浚われるとは思わなかったよ。親衛隊長の目の前で異空間に連れ去られた俺ってなんだ？ 魔王に浚われる姫じゃねえんだぞ」

「やめる。へこむ」

「部下に示しが付くのか？ その年で隊長だろ？ どうせ一緒に来た奴らに見栄はって警護は俺だけで良いとか言ったんだろ？ ん？」

「……その棘は俺以外の人間に刺せ」

う、あ、あ、あ、あ、あ。

唸るエルクから、キースは身を引いた。どれほど引いたかという、窓から扉までずざざと一瞬で移動するほど。

それほど、頭を抱えて唸るエルクから滲み出る黒い気は凄まじかった。どろどろ滴る気は床から窓ガラスへとしのびより、小さな音を響かせながら罅を入れていく。

「おお、これぞ物理怨嗟……って、そうじゃないな。エルク、やり過ぎだ。正気に戻れ」

「………あ？」

「今の現状を見るって言うてんだ。ほれ」

手元にあった硝子瓶を、キースはエルク目がけて思い切り投げつけた。かなり頑丈な出来らしく、黒い気に当たっても跳ね返されるだけで割れはしなかった。

「あ？ ……あ。 ……ああ？ 」

「こんのアホ。ようやく戻ったか」

「す、すまん！ またやつちまった！」

生き物のようにうねりながら、どす黒い気はエルクの中へと戻っていく。キースが足下まで迫っていたそれを気味悪そうに追い払っている様を見て、エルクは深々と溜息を吐いた。

「最近、出てなかったのによ……」

精神が不安定になると、時折現れるこれ。幼い頃から付き合ってきた現象ではあるのだが、この頃はちゃんと自身の心に歯止めが掛けられていたと思ったのに。

やつぱり、あの姫は苦手だ……。

「……いや、違う。俺が駄目な奴なんだ。なにやってんだお姫様相手に。『砕けた口調でも良いですか？』……ダメに決まってるんだろ。しかもお見通しですよお見通し。だけど、会話が逐一報告されるような状況じゃあ誰でもああなるだろ。会話できんだろ。てか、俺がダメなんだろう……！」

言い訳させてもらえるなら、混乱していたのだ。お姫様に手を握られ、突然異空間に転移したかと思えば「私を覚えてる？」の連続攻撃。回復するまもなくアダ名で呼べと言われて、拳げ句の果てが敬語をやめろ、である。殆ど「え？ え？ え？」しか考えられなかった自分が恨めしい。

「やめろやめろやめろ！ 落ち込むな！」

連続で頭頂部にチョップを食らった。危ういところで浮上したエルクは、それでも暗い溜息を口から溢れさせながら立ち上がる。

「ほ、ほら。このまま部屋にいても落ち込むだけだろ？ 城の中をちよつと歩き回ってみないか？」

「……良いのか？」

「別にお客様なんだから構わんだろ。少し外の空気を吸ってきたらどうだ？ てか吸ってこい！」

半ば強引に押し出されるようにして、エルクは部屋から追い出された。何度か踏鞴を踏んでから、頭を掻く。

王子様スマイルもどこへやら、幽鬼もかくやという表情でキースを振り返り、

「外の方が疲れるんだけどさ……」

「知るか。その前に俺の精神が侵される。ほれ、歩け」

周りに誰もいないから良いが、立場とがあつた物ではない。

キースはエルクの隣を歩きながら、その横顔を盗み見た。

……残っている全ての力を表情に込めてるぞこいつ……。

間近で見るとふるふる震えている笑顔が哀れを誘う。久しぶりにここまで弱っている。この一日でよくぞここまで憔悴したモンだ。驚きを通り越して感心すらする。

まだクローベル王家の伝統芸を見てないのになあ。

これで追い打ちを食らったら、本気で立ち直れないかも知れない。エルクはただでさえその類が苦手なのに。

長く息を吐く。己の失態を思い出し、頭を切り換えるためだ。

まあ、それも明日で終わりだ。それまでこの王子様が耐えることが出来れば、万事解決する。心配のしすぎだろう。

！

凄まじい殺気を感じた。先程の誘拐未遂で限界まで研ぎ澄ましていた感覚に触れた対象へとキースは鋭い目を飛ばし、

「あら、エルク様。お散歩ですか？」

メイドの一人がそこにいた。

ち、やりやがるわねこの護衛。

舌打ちしたい気分には駆られるが、それよりも笑顔、と自分をセルフコントロールした。これも念願成就のためである。

リュシカが姫様のお抱えメイドになって早十三年。七歳という若さでメイドとなった彼女には、これまで自身の理念に絶対不変の柱を立てていた。

姫様の幸せこそが真理。

しかし、今やその柱は存在しない。根元から叩き折った。倒れて粉々になって、ついでに上から踏み潰してやった。

(……認めません)

控え室を飛び出し、真っ先に向かったあの忌々しき敵がいる客室。

あんな。

もはや自分の身などどうでもいい。しかし、しかし。

あんなへたれヤロウに、姫様は渡せません！

謁見の間でサキの後ろに立っていたリュシカは見逃さなかった。姫が微笑んだ瞬間、あるう事かあの王子、顔を青ざめさせやがったのだ。

許すまじ！

自分は見ること叶わなかったというのに、何故幸運にも正面から見ることが出来たあいつがあんな反応をする。

そもそも、姫様の笑顔自体が竜の集団大移動並に珍しいというのに、その原因が二つともあの男だというのが気に食わない。

(姫様は絶対に何か勘違いをしています)

サキはあの男を知っている素振りを見せていたが、十三年仕えているリュシカの記憶に、そんなものはない。昔は今と比べて病弱だったので、他国に出かけていたとも考えにくい。

などなど、挙げていけばキリがないが、リュシカには一つだけこれだという確信を持てる事象がある。

あれほど可憐な姫様を見て忘れるわけがない。

つまり、初対面はずだ。変な誤解さえ解ければ万事解決する。

私は姫様のメイド、その誇りもある。

たおやかで美しい花を手折ろうとする下賤な虫は、さつさと潰してしまわなければならない。

そのために、ここに来た。

外面だけはあくまで笑顔で、ただし抑えきれない感情はそのままに、メイドは王子とその護衛に挨拶した。

わ、わー……、攻撃的な人だなこのひと……。
ただど悪意のある殺気だけど、本気の“殺す”という感情はこもってない。

へたれヤロウで下賤な虫は、幼い頃から王家の人間として最低限の教育を受け、殺気を感じ取りながらも笑顔で冷静に対応する懐の深さがあった。

「こんにちは。シエルさんのメイドさん……ですよね？」

「ええ。そうです」

笑顔だが目が笑っていない。

分かん。主人と従者、そろって行動が読めない。原因はなんだ。

「……おい、目が半端じゃないぞ。エルク、お前何した」

「……何もしてねえよ　　と言いついていなあ」

キースが腰の剣に手を掛けていた。目だけでそれを制止ながらも、エルクも同じ疑問を抱く。

確かにこの目はやばい。分からないが、何か病気にかかっている。後ずさりしたくなるのを我慢しながら、エルクはさつさとこの人から離れようと口を開き、

「エルク様、昔我が国にいらしたことは？」

「……ありませんが」

エルクの眉が跳ねる。メイドは続けて何かを訊ねようとするが、

二人の間にキースが割って入った。

「それでは」

「少々不躰ではありませんか？」

「……………」

「その自覚はあるようですね」

「言いよんだメイドに対し、キースはさらに追撃を仕掛ける。

「曲がりなりにも……………そうはみえなくても……………王位継承者の一人。

口の利き方を気をつけてください」

「てめっ」

「王子様は黙っててください。……………ほら。このようにこの方は気の長い方ではありません。早く退散しなさい」

「……………ツチ」

おい舌打ちしたぞこのメイド。

二人の心境が奇跡的に同調し、同じ表情を作った。

「今、『面倒なのに絡まれた』という表情をしましたね？」

「「さあ？」」

そっぽを向く方向も同じ。幼馴染み故の連帯である。

「……………じゃあ、また時間があるときでもお話ししましょう。それじゃ」

しゅたつと手を挙げて、エルクは身を翻した。背中に突き刺さる視線は全力で無視。その後ろに追隨したキースと共に、一つの結論に至る。

「……………この国も変な奴が多そうだな」

1 4 珍客のご来訪

初っぱなから珍妙な乱入者はいたものの、気分転換はまあまあ首尾よくいつていると言えた。先程から通路に人がいないこともあり、気を遣わなくてもいいせいもあるのだろう。エルクの顔色も大分よくなった。

城の中を散策して多少力を取り戻したエルクは、窓の外を見て小さな歓声を上げた。

「ふおお……。やっぱ大きいなあ」

「城の大きさは完全に負けたな」

軽く見積もって、中庭はエルクたちの国の1.5倍はある。流石、昔竜を飼っていた城は規模が違う。

「今はもういないんだっけか、竜」

「忘れてしまったが、十数年前だな、お亡くなり。数百年城を守ってきたらしいから、城の守りが一時期手薄になったらしいな。あー

……。お前は見たんだっけか」

「ん、見た見た。感動した。まさかウチに飛んでくるとは思わなかったなあ」

その日は五年に一度の“散歩”と称される翼伸ばしの日で、遠く離れたここから飛んできたらしい。改めて竜の凄さを実感した日でもある。

しかし、普段は視認できないほど天高く飛ぶのに、何故かその時は頭上で風邪が捲き起こるほど低い位置を飛んでいた。エルクがその日に街に出ていたのは奇跡であり、おかげで克明に目に焼き付けることが出来た。

ただ、やはりただ事ではなかったらしい。その数ヶ月後に竜は体調を崩し、それ以後の“散歩”では二度と空を飛ぶことはなかった。エルクが生き物としてはあまりに荘厳な姿を思い出し息を吐いている隣で、キースは苦い顔をしていた。理由を知っている者として

は、ご愁傷様と思うより他はない。

「うんうん、残念だったなキース」

「……の前に、王子がそんな日に城を抜け出すな」

「風邪で寝込んで見れなかった奴に言われたくねえ」

「ほう。俺が一番悔いている過去を……！」

そんな風に軽口をたたき合いながら歩き続けて、しばらく経った
ときのことだった。

エルクは当てもなく足を進め、キースがそれに着いてきていたの
だが、突然笑顔を振りまいていた王子の足が止まった。

「……キース、監視は何人いる？」

「……二人だな。それがどうした？」

二人か。たぶん見合いのときに姫の護衛にいた二人がそのまま監
視としてついたんだな、とエルクは頭の中で考え、また咳く。

「……今ここで俺が急に方向変えて走ったらどう思われる？」

「……少なからず不審に思われる」

「……だよな」

「……諦める」

笑顔のまま暗く長い溜息を吐くという器用な技をやったのけたエ
ルクは、真つ正面から歩いてくる彼女に対して会釈した。

従者といい主といい、そんなに俺に会いたいか、ちくしょう。

これだから、外に出たくなかったのに。

「先程はどうも、シエルさん。お散歩ですか？」

「散歩じゃなくて、あなたに会いに来た」

率直な物言いに言葉が詰まる。何度か口を動かしてから、エルク
はようよう言葉を紡ぎ、

「……えー……、私は見合い以外であなたに会うことは禁じられて
いるのですが」

「そう、私も禁止されてる。だから抜け出してきた」

胸を張る姿は、どこか誇らしそうである。無表情でよく分からな
いが。

先程会ったばかりの彼女は、何故か裸足で絨毯の上を歩いていた。それに気付いたエルクが指摘しようとする前に、サキは若干早口で言葉を紡いだ。

「部屋の中に入れてくれると嬉しい。直ぐにリュシカが来るから」

「リュシカ……って言うと、あのメイドさんのことですか？」

「うん。いないから抜け出せた」

なんと。仕事放棄してたとは。そして抜け出したから彼女は裸足なのだろうか。

「あの人なら客室の前にはいましたが？」

「大丈夫。多分、もう部屋に戻ってる」

「……………」

作戦を練る猶予は……なさそうだ。こっそりキースを見ると、目配せしてきた。

その目は言外に「諦める」と雄弁に語っていた。

「よろしいのではないのかと。時間もあることですし、訊ねてこられたのはあちらなので、少々なら大目に見て頂けるではありませんか？」

エルクの眼光が陰しくなる。こいつ、さっきからかった仕返しをしようとしてやがる。

あの半眼になった金色の目を突きたい。王子らしからぬ衝動をぐつと堪え、エルクは笑顔でサキに向き直った。

「ではシエルさん。ほんの僅かでしたら、あなたのお父上もお許しくださるかと思えますので、本当に少しだけなら」

「分かった。ありがとう」

厄介な人に会っちゃたな……。

エルク的には、さっきのメイドより心臓と胃に悪い。

さっさと歩き出したエルクとサキの後ろで、キースは背後に向かって『ついてこい』と口だけを動かして伝えた。壁の中の隠し通路にいた監視者達はしばらく逡巡したようだが、エルクが姫を連れて元来た道に戻り始めたのを見て慌ててついてくることにしたようだ。

「……と、いうわけだけど、いいよな」

「……もう勝手にしてくれ……」

一応、より一層厳しく監視される本人に確認を取ったのだが、既に自暴自棄になっていた。

結局、紆余曲折の結果あまり気分転換にもならず、逆に胃痛の種を斜め後ろに付き添わせたまま部屋の前まで戻ってきたエルクは、大人しくついてきている姫様を振り向いて確かめた後、扉を開けて部屋へ入った。

「では、私は外で控えております。……監視の奴らを引き留める。保って十分だ」

了解、と小声で答えてから、エルクはわざと横行に頷き、

「ん。頼むぞ。シエルさん、どうぞこちらに」

姫様を招き入れ、キースの眼前で扉を閉めた。

1 4 珍客のご来訪（後書き）

時間がないよう。

1 5 狂気の来客

初っぱなから珍妙な乱入者はいたものの、気分転換はまあまあ首尾よくいつていると言えた。先程から通路に人がいないこともあり、気を遣わなくてもいいせいもあるのだろう。エルクの顔色も大分よくなった。

城の中を散策して多少力を取り戻したエルクは、窓の外を見て小さな歓声を上げた。

「ふおお……。やっぱ大きいなあ」

「城の大きさは完全に負けたな」

軽く見積もって、中庭はエルクたちの国の1.5倍はある。流石、昔竜を飼っていた城は規模が違う。

「今はもういないんだっけか、竜」

「忘れてしまったが、十数年前だな、お亡くなり。数百年城を守ってきたらしいから、城の守りが一時期手薄になったらしいな。あー

……。お前は見たんだっけか」

「ん、見た見た。感動した。まさかウチに飛んでくるとは思わなかったなあ」

その日は五年に一度の“散歩”と称される翼伸ばしの日で、遠く離れたここから飛んできたらしい。改めて竜の凄さを実感した日でもある。

しかし、普段は視認できないほど天高く飛ぶのに、何故かその時は頭上で風が捲き起こるほど低い位置を飛んでいた。エルクがその日に街に出ていたのは奇跡であり、おかげで克明に目に焼き付けることが出来た。

ただ、やはりただ事ではなかったらしい。その数ヶ月後に竜は体調を崩し、それ以後の“散歩”では二度と空を飛ぶことはなかった。生き物としてはあまりに荘厳な姿を思い出し、エルクが息を吐いている隣で、キースは苦い顔をしていた。理由を知っている者とし

ては、ご愁傷様と思うより他はない。

「うんうん、残念だったなキース」

「……の前に、王子がそんな日に城を抜け出すな」

「風邪で寝込んで見れなかった奴に言われたくねえ」

「ほう。俺が一番悔いている過去を……！」

そんな風に軽口をたたき合いながら歩き続けて、しばらく経った
ときのことだった。

エルクは当てもなく足を進め、キースがそれに着いてきていたの
だが、突然笑顔を振りまいていた王子の足が止まった。

「……キース、監視は何人いる？」

「……二人だな。それがどうした？」

二人か。たぶん見合いのときに姫の護衛にいた二人がそのまま監
視としてついたんだな、とエルクは頭の中で考え、また咳く。

「……今ここで俺が急に方向変えて走ったらどう思われる？」

「……少なからず不審に思われる」

「……だよな」

「……諦める」

笑顔のまま暗く長い溜息を吐くという器用な技をやったのけたエ
ルクは、真つ正面から歩いてくる彼女に対して会釈した。

従者といい主といい、そんなに俺に会いたいのか、ちくしょう。

これだから、外に出たくなかったのに。

「先程はどうも、シエルさん。お散歩ですか？」

「散歩じゃなくて、あなたに会いに来た」

率直な物言いに言葉が詰まる。何度か口を動かしてから、エルク
はようよう言葉を紡ぎ、

「……えー……、私は見合い以外であなたに会うことは禁じられて
いるのですが」

「そう、私も禁止されてる。だから抜け出してきた」

胸を張る姿は、どこか誇らしそうである。無表情でよく分からな
いが。

先程会ったばかりの彼女は、何故か裸足で絨毯の上を歩いていた。それに気付いたエルクが指摘しようとする前に、サキは若干早口で言葉を紡いだ。

「部屋の中に入れてくれると嬉しい。直ぐにリュシカが来るから」

「リュシカ……って言うと、あのメイドさんのことですか？」

「うん。いないから抜け出せた」

なんと。仕事放棄してたとは。そして抜け出したから彼女は裸足なのだろうか。

「あの人なら客室の前にはいましたが？」

「大丈夫。多分、もう部屋に戻ってる」

「……………」

作戦を練る猶予は……なさそうだ。こっそりキースを見ると、目配せしてきた。

その目は言外に「諦める」と雄弁に語っていた。

「よろしいのではないのかと。時間もあることですし、訊ねてこられたのはあちらなので、少々なら大目に見て頂けるではありませんか？」

エルクの眼光が陰しくなる。こいつ、さっきからかった仕返しをしようとしてやがる。

あの半眼になった金色の目を突きたい。王子らしからぬ衝動をぐつと堪え、エルクは笑顔でサキに向き直った。

「ではシエルさん。ほんの僅かでしたら、あなたのお父上もお許しくださるかと思えますので、本当に少しだけなら」

「分かった。ありがとう」

厄介な人に会っちゃたな……。

エルク的には、さっきのメイドより心臓と胃に悪い。

さっさと歩き出したエルクとサキの後ろで、キースは背後に向かって『ついてこい』と口だけを動かして伝えた。壁の中の隠し通路にいた監視者達はしばらく逡巡したようだが、エルクが姫を連れて元来た道に戻り始めたのを見て慌ててついてくることにしたようだ。

「……と、いうわけだけど、いいよな」

「……もう勝手にしてくれ……」

一応、より一層厳しく監視される本人に確認を取ったのだが、既に自暴自棄になっていた。

結局、紆余曲折の結果あまり気分転換にもならず、逆に胃痛の種を斜め後ろに付き添わせたまま部屋の前まで戻ってきたエルクは、大人しくついてきている姫様を振り向いて確かめた後、扉を開けて部屋へ入った。

「では、私は外で控えております。……監視の奴らを引き留める。保つて十分だ」

了解、と小声で答えてから、エルクはわざと横行に頷き、

「ん。頼むぞ。シエルさん、どうぞこちらに」

姫様を招き入れ、キースの眼前で扉を閉めた。

踵を返し、部屋の真ん中に立っている姫様と視線を合わせ、

「……とりあえずそこに椅子があるので、そこへお座りに　じゃなくて座って」

「分かった」

つつつと移動して、静かに座る。なんとなくお上品だ。どこがどう、と訊かれると困るけど。

「シエルさん、何の用？」

「お願いがあったの」

首を傾げたエルクに、

「エル君って呼んで良いか、訊きに来た」

エルク。君。エル君。

「……ご、ご勝手に」

そう答える以外に、どうすればいい。曖昧に頷いたエルクは、恐らくキースが投げたモノと思われる花瓶を床から拾い上げた。

傷一つ付いていないところを見ると、相当丈夫なのは間違いないだろう。表面を手の平で撫でながら、エルクは顔を上げないで言葉を紡ぐ。

「シエルさん。少しの間だけ目を瞑って貰っていい？」
「分かった」

せめて何をするつもりとか訊いても良いのに……、とあまりにサキが素直に頷いて目を閉じたため、訊かれても答えられないエルクは思う。花瓶を何度か手で弄くり回したあと、一度上へ投げる。

片手で受け止めたそれを、綺麗に振りかぶったオーバースローで、
「ぼーん」

軽く呟いて全力投球した花瓶は、間違ってもそんな生易しい飛び方ではなく、そこそこ重いにも関わらず真っ直ぐな弾道を描き「ぶひゅっ」跳ね返ってきた。

窓の外で「お、怒ってる！」木々を揺らしながら「やばい、逃げろ！」何か重たいモノが落ちていき「ていうかあいつ大丈夫か？」
「ほっとこ！ 我が身第一！」地面と衝突してくぐもった音を立てた。それに次いで地面に飛び降りた二つの音がし、遠ざかっていく。

輝く笑顔。

バルコニーまで行き地面を見下ろしたエルクは、その予想通りの惨状に満足気に頷いた後、こちらを振り向いて固まっている男女二人組に対してにこやかに手を振った。

それから笑顔のまま、明確に口を動かし「ゆ」「る」「さ」「な」「い」と至極簡単に伝えようと、部屋に戻って窓を閉める。よかった、まだ目を閉じている。

「もういいですよ」

「……ス」

「はい？」

聞こえなかったので不躰ながらも訊ね返したエルクに、「なんでもない」とサキは今度ははっきりと伝えた。

さて、どうしよう。

エルクの頭を悩ませるのは、このお姫様の目的はもう達成されたという事実だ。なら、用が終わったのになぜここにいるのか。帰る機会を逃したのかも知れないが、適当に言い繕って外に出ることも

可能なはずだ。違う用事がある、とかなんとか言ってる。

しかも、見間違いや思い違いでなければ、無表情でわかりにくいのが恐らく、多分、確証はないが、……嬉しそうだ。

「あの、シエルさん？」

「なに」

「う、嬉しそうだね」

間違っていたらどうしよう……、エルクのそこはかかない不安はサキが頷いたことにより払拭された。

「……………」

「……な、なにか」

「こてん、と首を倒したサキは、

「迷惑？」

「え？ そんなことはないよ」

素直な本心だった。

居心地が悪いというのは本当だが、迷惑ってほどではない。思ったよりも相手が喋って気を遣ってくれるからかもしれない。

「そう？」

凍り付いた。

辺り一帯が一瞬で華やぐ笑顔。

万年凍てついている永久凍土が一瞬間後に蒸発していたのを目の当たりにしたかのような気分だった。

「え……あ……うあ……」

上手く言葉を発せないでいるエルクに代わり、これ以上はないというタイミングで部屋の扉が開きキースが顔を覗かせた。

「エルク様。皇女様のお付きの方が廊下を猛然と駆けてこちらに向かっておられ　は？　なんで固まって　」

「ひいめえさあまあああつ？」

見事な飛び膝蹴りが驚いていたキースの後頭部に直撃した。

空中に浮いた親衛隊長の身体は、その護衛対象である王子様の身体を巻き込んで二人そろって壁に激突する。

「……俺、決めたよ。やつぱりお前……クビにする……」
「……面目ない……」

呻くキースの身体をエルクは両手で乱暴に押しつける。よく見ると、キースの手は剣の柄にかかっていた。

抜くか抜かないか迷っているうちに蹴られたのか……。

相手は皇女専任のメイド、しかも城内。どんな騒ぎになりどんな問題へ発展するのかは目に見えている。

頭の早いコイツのことだ。余計なことを考えすぎ、結果大人しく蹴られてしまったのだろう。いや、もしかしたら蹴られるのを選択したのかもしれない。

「……避ければよかつただろうが」

「……そしたら、お前に直行してたんだよ」
わざと蹴られたらしい。頭の早い奴。

呻いて床に転がっている客人二人を無視して、さらには扉から恐る恐る顔を覗かせる二人の監視者を無視して、リュシカはサキに掴みかからんほどの勢いで詰め寄った。

「姫様！ なぜ勝手に部屋を抜け出したのですか！」

「話したいことがあったから」

「は、はなしっ？」

どうしまししょうももしかしたら姫様は私の知らないうちにあのへたれ王子と将来を誓い合う仲になってしまったのかもしれないいいえ信じないし認めないでももしそうだとしてやつぱり包丁を研いでおいて正解だったかも偉いわリュシカだけど姫様の思い人を手に掛けるのは忍びないわねダメよりユシカ誓ったじゃないちゃんと誓いは守るべきよそうじゃないと殿方と二人きりになってしまふような状況を今後もみすみす見逃してしまふかもしれないじゃないああでも

「……」

「……」

「……」

ただ漏れだった。

無言のまま固まる三人。

本来隠すべき心情を、きつとあまりに動転していたために吐き出してしまったのだらう、物騒な台詞を聞いてしまったエルクは、視線を従者から主人に移した。

「……ごめんなさい。ちゃんと、注意しておくから」

珍しい。これほど『困っている』と表情に出ているのは。

「……お願いします。それと、もうお引き取り願えませんか」

笑顔が引き攣ってしまったのはご愛敬だらう。

床に寝そべっているキースを足の爪先で突き、客室にあらかじめ用意されていた屋内用の靴を指さす。自分で取りたいところなのだ、二人分の体重を受け止めたのでまだ立てる気がしないのだ。

丁重に二人の来客者を部屋から追い出してから、キースはエルクの手を引っ張って立ち上がらせた。

「……明日には、全部終わるんだ。耐えろ、それしかねえ」

「……分かってる。つーか、なんなんだあのメイド……」

「……それ以上は言うな。扉の外に、まだ監視がいる」

国家間の文化の違いを目の当たりにし、それでも大事にしたくないため文句も言えない二人組はそろって溜息を吐いた。

1 5 狂気の来客（後書き）

内容が……いや、やめておこう。

次回からちゃんと物語が動く………予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2318y/>

無口な姫と顔色の悪い王子

2011年11月17日03時12分発行